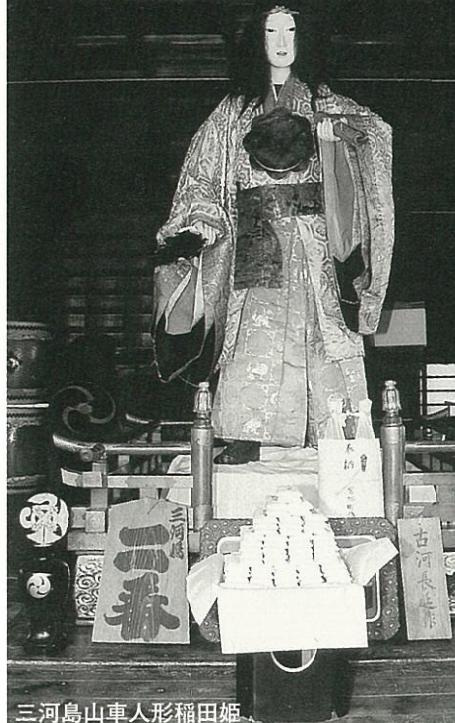


歩みを止めた

山車人形たち



三河島山車人形稻田姫



三河島山車人形熊坂長範

諏方神社神楽殿の山車人形源為朝

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(14)0027号

朝から境内が賑やかです。4月28日、6月の素盞雄神社の大祭に備えて、旧三河島地区の大西町会・荒川四丁目西仲陸会・荒川文化会・荒川宮地町会の四町会の人たちが、山車人形の稻田姫を神楽殿内に飾る日です。人形は、古い箱の中に解体して保管されています。一体どのようにして出来上がるのでしょうか。稻田姫は、いわば大型の衣裳着人形で、町会の人たちの振付が重要です。正味一時間ほどで稻田姫は私たちの目の前に凛とした姿を現します。古川長延という高名な人形師の作で、頭の箱書きに「文久元年酉九月出来」の銘があります。

一方、大祭本番を明日に控えた6月7日の夕方、通称疎開道路沿いの荒川中央町会神酒所

(坪川製箱所・荒川二丁目に人の山が。こちらでは茶箱の中から熊坂長範の山車人形の頭や衣裳

が取り出され、町会の人たちによつてテキパキと組み立てられていきます。熊坂長範が張子でできた岩の上で見得を切ります。

片や神社の神楽殿、片や町会の神酒所に出現した山車人形は、この後山車の上に運られることがあります。

なぜならば、かれらは歩みを止めました。西日暮里三丁目諏方神社の神樂殿の上にも源為朝の山車人形が飾られています。こちらもまた、山車の上に華々しく乗つて曳かれることはありません。

なぜならば、かれらは歩みを止めた山車人形だったからです。明治、大正時代の頃までは、

山車——とりわけ人形を乗せた山車——は祭の華でした。これ以外にも、たくさんの山車人形が作られ、町や村を練り歩いていたのです。ただ、近代という時代は、彼らには住みにくい時代であったようです。市電の開通、張り巡られた電線、増加する一方の交通量——あるものは地方に活躍の場を移し、今も現役で練り歩いています。また、あるものは歩みを止め、あらかわの祭の移ろいを眺めることになりました。現在、区内には幕末から明治にかけて作られたものとしては、3体の山車人形が伝存しています。震災・戦災をくぐりぬけ、町の人々によって、組立の技術とともに大切に守られてきたもので、地域の歴史を伝える貴重な有形民俗文化財といえます。

平成14年度企画展 「あらかわ祭事記

「描かれたまつり、 誌されたまつり」

この秋の荒川ふるさと文化館企画展は「祭」がテーマです。祭は、町の変化を見つめながら、町の人々の暮らしを支えてきた生活のリズムであり、精神的支柱といえます。そして、これらの中には、山車人形のように時代の変化、町並・構成員の変容とともに形を変え、または消滅していくものもあります。展示では、さまざまな荒川区の祭の歴史を、区外の文化財・パネルで紹介します。さらに、多彩な関連イベントも開催しますので、是非ご来館ください。

(会期) 10月26日(土)～12月22日(日)

(野尻かおる)

職人さんのお話

職人さんの「ことば」 ～指物師の道具～

『ナンキン』一座
卓(テーブル)など
の脚にテリをつける
とき使う。』

この文章、皆さんには意味がわかりますか? これは、ある指物(さしもの)の職人さんを調査した際に筆者がメモしたものです。

指物とは、一般的に『木を差し合わせて作った、机・たんす・箱などの家具や建具の類』といわれています。居職(いしょく)といって、自宅を仕事場としている場合が多く、作業台である「当て台」の前に座って、製作のほぼ全工程を職人さん一人で行います。指物師は、引き出し箱やたんすなどに限らず、何でも注文に応じます(そこが自負するところでもあります)。よって、使う道具も製品に合わせて自分たちで作ってしまいます。なかには、ある製品の一部を仕上げる為だけに使う道具を作ることもあります。「かんな」を例にとつて見ても、台の長さが五〇センチにも及ぶ大きなものから、指先に乗つてしまふような小さな物まで、様々できちんと整理されて置いてあります。

皆さんも「存じのとおり、荒川区にはたくさんの職人さんが住んでいます。区ではこれまで多くの職人さんを調査してきました。調査は職人さんの持つ伝統的な技術・技法を記録することが目的です。実際に職人さんのお宅に行き、お話を聞くことになるのですが、そのなかでも職人さんの口からついて出た「ことば」がとても重要になります。ですから、調査のときはこういった「ことば」を聞き逃さないようにメモしていくのです。特に道具の名前や手法には、その職人さん独自の呼び方やや�名のができます。次のやりとりはあります。

かつて東京の大工さんは、自分の使う道具を「オモチャ」と呼んだりしていたそうです。手入れを欠かさず、子どもがお気に入りのオモチャを大事にするように常に身近に置いて、てばなすことはありませんでした。(もつとも、子どもはオモチャに飽きたら、さっさと放り出します)道具を大事にすることは、どの職種にもいえることで、道具の手入れが悪かったり、良い道具を一式持つことができなかつたりすると一人前とは扱われません。

さて、話がだいぶ横に逸れてしましましたが、冒頭の「ナンキン」とは『日本国語大辞典』(小学館)を見ると『南京鉋(なんきんかんな)』といい、「そり台かんな」の一種とあります。「そり台かんな」は「そり台」と略していることもあり、木材の湾曲した面、つまり反っている面を削るのに適したかんなのことをいいます。

確かに指物の職人さんは、このかんなのことを「そり台かんな」と呼んでいる方

もいました。このように同じ用途で使い、形状が一緒であつても呼び方がまったく違つものがあります。職人さん自身も昔から呼び慣わされている名前を使つていつたり、本などで調べた名前で呼んでいたりする場合があるようです。ちなみに「テバ」では、反つている面をいい表した「ことば」であり、ここではテーブルの脚部分をデザイン的に曲面に仕上げた形のことです、「テリ脚」ということもあります。

調査では、職人さんは一つ一つ丁寧に

解説してくれます。先の「ナンキン」のように名前と用途が具体的に分かるものなら良いのですが、時折道具の名称があやふやなものがでてきます。次のやりとりはそんな場面でのヒトコマ。

筆者 (ある道具を指して)
「この道具の名前はなんていいうんですか?」

職人 「これ、なんていったかな…」
筆者 「あまり見たことのない形の道具ですかね。」

職人 (棚から本を取り出して道具のページをめぐりながら)
「うーん、これかなあ…」

筆者 「普段、呼んでる名前でいいんですが…」

職人 「いつも手の届くところに置いてあるからいちいちよばねえよ」

筆者 「うーん、これかなあ…」

職人 「普段、呼んでる名前でいいんですが…」

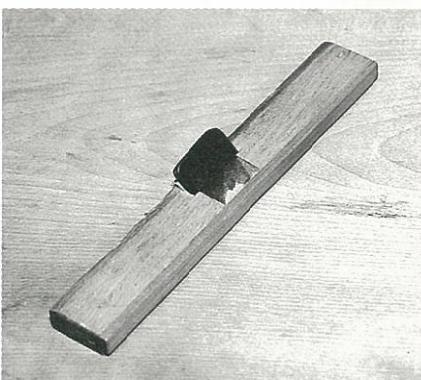
筆者 「うーん、これかなあ…」

職人 「いつも手の届くところに置いてあるからいちいちよばねえよ」

街角のしるし①



今回はコレ!



「ナンキン」(根本一徳氏所有)

爺孫

既に関心が薄れた孫であった。

(龜川泰照)

爺孫

既に関心が薄れた孫であった。

あれは明治の始め、内務省つていうお役所が測量したときに付けた記号らしい。「几号水准点」といつて、どうも

爺孫

おとといの鳥居のことだけど、頑張つちゃつたよ(少し自慢げ)。インターネットとやらで調べてみたんだけどね。

爺孫

おとといの鳥居のことだけど、頑張つちゃつたよ(少し自慢げ)。インターネットとやらで調べてみたんだけどね。

爺孫

おとといの鳥居のことだけど、頑張つちゃつたよ(少し自慢げ)。インターネットとやらで調べてみたんだけどね。

爺孫

おとといの鳥居のことだけど、頑張つちゃつたよ(少し自慢げ)。インターネットとやらで調べてみたんだけどね。



まずは辞書から。

金銭や品物を贈り与えること。
贈呈。贈予。進呈。

：『日本国語大辞典第一版』第四巻、139頁
このとき、誰が、誰に、何のために「寄贈」するかがポイントです。荒川ふるさと文化館への「寄贈」が意味するところは、どのようなものでしょう。

そもそも当館は、区の歴史や文化に親しみ、学ぶことができる施設として開館しました。その材料は、資料や情報以外にありません。ですから当館は、保存や区民の方々の利用を前提に、区の歴史や文化に関する資料をどこからか収集し、そしてまた区民の方々に適宜提供する、そんな構図を前提に「寄贈」をした側も、この構図の中に存在しています。

したがって、「寄贈」をした側も、この構図を前提に「寄贈」してくださったということになります（と信じたい）。全ての寄贈資料は、基本的にそういう意味を帯びているとおもえられます。その上で、個々の資料は、独特の情報を発しているといえます。

そこで、奇遇な例を一つ。

つい先日、荒川三丁目住の小口政子氏から、「三河島史料」（三冊）という資料をご寄贈いただきました。これは、入本英太郎氏が、「三河島町郷土史」（昭和七年一九三二年刊）を編纂するため、収集した資料を綴つたものです。「三河島史料」の当初の目的はすでに果たされたともいえます

が、今日的には次の情報を発しています。

まず、当資料が今日も日本のどこかで作り続けられている自治体史編纂の、初めの頃の様相を今に伝えているということです。こうした資料は、あまり残っていないと思われます（少なくとも、区内においては）。そもそも「三河島町郷土史」は、区制導入の年（町制消滅の年に刊行されたことからも窺るように、「郷土」「三河島を改めて意識し、記録しておこう」という試みであり、「地域への感心の歴史」を今に伝える貴重な資料ということができます。ちなみに以降、荒川区は区史を計三回編纂します。ところが、史料集はなく、区民の方が区の歴史や文化を学ぶ上で大きな障害となっています。そうした意味からすれば、この資料は「三河島町郷土史」のために作られた史料集ですし、かつ、今では現存しない資料を所収していることは貴重です。荒川区で刊行されたことのない史料集として、いままで通用すると思います。

ところで、当館では、地域の歴史を学びたい、あるいはさらに深く知りたいという方々の一助になればと、昨年度から年一回ずつ「文化館*ブック」を発行することになりました。その第一弾が実は「三河島町郷土史」でした。それを考えると何とも奇遇な「寄贈」ではありませんか。

そこで（？）、宣伝を：「文化館*ブック」で有償頒布しています。

（亀川泰照）



専門員の日々② 展示の裏側

～エピソード①～

おすましした展示。整然と並べられた「モノ」。展示を「覧になって、そのような印象を持たれる方もあることでしょう。最近では「博物館」も世の中にだいぶ認知されるようになりましたが、「郷土資料館（博物館）」に勤めているというと「切符り？」、「監視の人？」と聞かれることもままあります。「仕事が楽そう」「暇そう」そんな印象があるようです。しかし、実際のところは、時には「産みの苦しみ」を味わい、時にはなまつた身体にむち打ちながら力仕事をこなす、そんな日々です。

では、その実体はどんなものなのでしょうか。「博物館」には大きく分け「資料収集」「資料保存」「調査研究」「教育普及（展示）」という仕事があります。（文化館の場合）は、区内文化財の保護・啓発も行っていますが、来館者の目にとまるのは「教育普及」が大部分を占めます。この一見華やかな「教育普及」（面白そう、楽しそうなどという言葉がきかれるのもこのためでしょうか）の裏側には地道な作業の積み重ねがあるのです。

ここでは、「館蔵資料展」をモデルに文化館の仕事の一端をみていきましょう。「館蔵資料展」は開館5年目の今年、通算20回目を迎えました。文化館で収蔵している資料は、民具、生活用品、考古資料、古文書、書画、号外など膨大な数のぼります。これらを年2回の企画展で公開していくのは困難です。館蔵資料が「死蔵資料」ならないよう、なるべく多くの資料を活用していただけるように、と、年3、4回「館蔵資料展」を開催しています。

では、次回、実際の展示作業現場の中でも、実際に展示作業を行いたいと思います。（加藤陽子）

す。

前年度にある程度、大まかな展示内容及び展示の担当者（この場合、主に専門員）を決定します。その計画に従い、担当者は構想をねります。「展示」というと単に「モノ」が並んでいるだけと思われるかもしれません、「展示」にはストーリーが存在し、何かしらのメッセージを送っています。それは、テーマによつて様々です。しかし、論文と異なつて、展示は

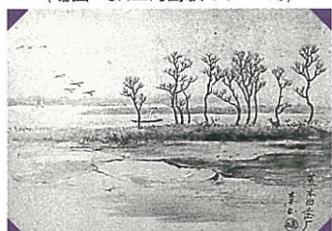
「モノ」で論旨を語らなければなりません。論文で使うにはよい資料であったとしても、「展示」で有効な資料とは限りません。しかも、論文と異なつて、展示は膨大にあるとはいえ、展示内容にみあつた資料を探すのは容易ではないのです。また四苦八苦した末に、ストーリーを考え出し企画書を提出したとしてもそれがそのまま通るとは限りません。よりよい「展示」を目指して、内部で様々な議論を戦われます。

内容が決定されると今度はコーナーパネル（論文でいうとコーナーは「章」や「節」にあたります）や資料についている解説文（キヤップション）を書いていきます。私たちも全てを知つてゐるわけではありませんので、辞書や先行研究などを参照しながら、また新たに発見したことなどを盛り込みながら、推敲に推敲を重ねて文章を作成します。同時に、展示のレイアウトも作つてきます。現在館内にある道具（展示するための道具）や展示ケースで間に合うように注意しながら、企画展展示室の画面とにらめっこをします。そして、来館者に印象ある展示空間を体感してもらえるよう、可能性を模索していくのです。

地名のつぶやき

④三河島の搖らぎ

〈場面 JR三河島駅のホームで〉



三河島八景の内
「荒木田落雁」

町屋さんの言葉（「文化館だより」8号地名のつぶやき③）を気にしつつ誰かに語りかけるよう

ここは、苦い思い出の場所です。誇り高き一族の地名を全国に広め、そして傷つけた三河島事故が起きた所ですから。「おまえは、尚且つそこに生きているんだろう」っていうんですか。なんとなく納得できないでいるんですよ。良い思い出、悪い思い出はあれど、歴史を重ねた地名を捨てなければならなかつたことをね。

ご先祖さまが、いつからここにいるのかは、知りません。でも、分身である小字の「釜が坪」「二の坪」は古代の条里制の名残だという方がいるんです⁽¹⁾。それから古代の地名「白方」を「はかた」と読んで、これが荒川町屋地区の小学校名に使われる「岐田」になつたなどとおつしやる先生も。当事者である私にはなんのことやら難しくてトンとわかりませんがね。

地名の由来と歳です。徳川家康関東入部の折に三河国から従つてきた人が知行したため三河島と呼ぶ」とか有名人にあやかつたのがいくつありますが、むかし中川・古利根川・荒川の三つの川に囲まれた島状の中州だったから、という入

本英太郎さんの説が一番氣に入っているんです。今のところ40歳は優に越えているかと思います。戦国時代永禄2年（一五九三）に関東地方におられた皆さんとともに『北条氏所領役帳』に「三河ヶ島」と加えていただきました。誕生の記録はありませんので、「今のところ」と一言付けて加えたのです。上野寛永寺様にお仕えしていた頃は豊かな農村で、冬には鶴や雁が飛んで来て鷹狩の将軍様ご一行をお迎えする、そんな時代もありました。元々牧歌的な私には、その後にやつて来た日本最初の下水処理場、近代的な火葬場、住宅の密集、区制の導入などの目まぐらしさとばかり。気付いたら「荒川」への改称が始まつていて昭和43年には何處もかしこも「荒川」を名乗っていた。私の地名へのこだわりが結果として駅名や施設名に残されたのだと、せめて思いたいですよ。しかし、地名を元に戻せないでいるんですよ。良い思い出、どうぞと無粋なことはもういいますまい。数え35歳の「荒川」さんも歴史を作りつつあるのですからね。どうぞ安心を、「三河島八景」を飽かず眺めつつ、往々日々を偲ぶことにします。

註

- (1) 荒川総合報告書2「荒川 人文」（埼玉県）特別展 関田川流域の古代・中世世界—水辺から見る江戸・東京前史—（足立区立郷土博物館・すみだ郷土文化資料館・財団法人宮本記念財団）
- (2) 『大日本地名辞書』（富山房）
- (3) 『三河島町郷土史』（文化館*ブックス郷土史①）

（野尻かおる）

東京板紙と子守唄

タイムスのスルズ⑧

南千住六丁目に、煉瓦造りのボール紙製造工場がありました。現在のアクロシティというマンションの西部に当たります。

その歴史は古く、明治時代に遡ります。秀英社（現大日本印刷）の佐久間貞一が、研究に研究を重ねて、日本で初めて新式抄紙機械を輸入し板紙（ボール紙）を製造しました。明治22年（一八九〇）のことです。

「東京板紙会社」といい、紙の需要の増加を見込んで、英國人技師を招聘して起業しました。近郊で大量に入手できる稲藁、後には反故紙等を原料としたといいます。しかし、創業当初、経営状態は安定していました。近郊で大量に入手できる稲藁、後には反故紙等を原料としたといいます。しかし、創業当初、経営状態は安定していました。

そのころ、このあたりの子供が「うざさんでいた子守唄があります（佐久間貞一小伝）。

「いきな紡績小糸な羅紗場つぶれがゝりは板紙会社」「羅紗場窓から板紙見れば西洋乞食が紙をほす」。

前者は思わしくない工場の経営状況を、後者は反故紙を利用し西洋伝来の技術で紙を製造していくことを、揶揄したものと思われます。現代人の我々にしてみれば、あけすけのない言葉に思わず耳を疑つてしまいそうですが、この歌は子供が作り出したにせよ、当時の大人のおおかたの見方だったのでしょうか。

参考文献

- 『東京板紙（自明治20年至大正8年の余韻）（昭和54年）』、『佐久間貞一小伝』（昭和7年増補再版）

（野尻かおる）

南千住では、明治12年の千住製紙所（南千住六丁目）、同39年の東京毛織株式会社、同43年の東京紡績工場（南千住八丁目）など大規模な工場の誘致が進められていました。そして殖産興業政策、軍

事景気のにて、どの工場も活況を呈し経営拡大をしていましたから、東京板紙の低迷は目立つものだったのでしょう。

しかし、同27年貞一と旧知の間柄であった技師小野寺正敬を迎えるや、情況は好転していきます。創業以来無配当であつたのが、翌年には10%までに回復し、その後は順調な経営を続けていきました。

子供は世情に敏感です。さっそく、次のような唄を編み出しました。

「羅紗場牡丹に紡績かきつなせか板紙百合の花」



（岩井真吾氏撮影）